

## 【日生連研究部イブニングゼミ】 加藤聡一

第1回 全体構成図の説明と、上巻第4章「成長としての教育」 2022年3月26日(土)19:00~20:30ごろ

第2回 下巻第23章「教育の職業的側面」 4月23日(土)19:00~ ZOOM

### ① 『民主主義と教育』島（DE 島）の探検！

第4章は、くり返し立ち返る泉のような場所。第23章は、全体が見渡せる小高い丘。

専門の場合、読む前に、どんなことが書いてあるか、妄想（仮説）を持ってほしい（読んでいないのに書く読書感想文!）。その「仮説」を読みながら補強・修正していく。「誤読」が読みを深める！

ともかく読んでいこう！ あちこちに「これはわかる」「これは大事そう」というマークを残していく。

いずれ、時間をかけてどこかの章か、はじめから通して読む。

全体の見取り図は、「序」と第24章の一参照。

ていねいでわかりやすい説明は、「発見する権利」（スペンサー）を「侵害」するので「ガイド」ぐらいで。

※英文は、DEMOCRACY AND EDUCATION by John Dewey 1916

<https://www.gutenberg.org/files/852/852-h/852-h.htm>

① 『民主主義と教育』の全体構成図

ライフ（生物 個体・集団／人類 個人・集団、の四層）の連続・累積が大きな流れ。それを詳しく見ていく。

デューイがたたかったものは分断と孤立。「概念」もバラバラになっていくのをつなぎ直した。

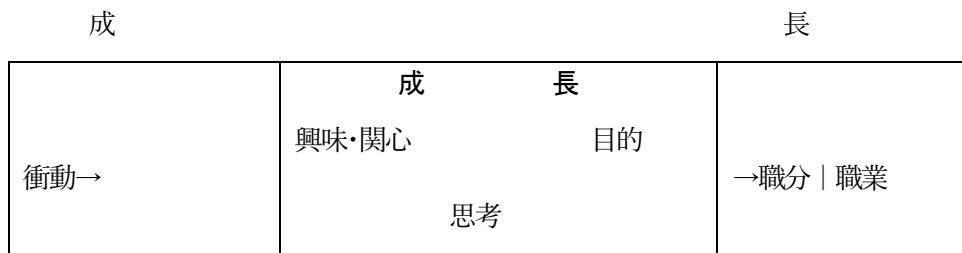
①

民主的基準（社会をはかる尺度）（望ましい諸特徴）：第7章④上 136 ページ 2 行目

↓

望まれる変化 第23章⑳ 下 184 ページ 6 行目～

② 「エンジョイ○○」は、衝動→興味（関心）→目的→職分 | 職業



{ちなみに背後に（衝動・習慣・知性）（テオーリア・プラクシス・ポイエーシス）←アリストテレス

③ タンスのように段というか層がある。（つまり自然の島でなく、ビルのような感じでした！）

ライフ	経験	学校（オキュペーション）
生物学・生活	哲学	教育で

※政治の段は『民主主義と教育』にはない（第7章五で少し国家論あり）。デモクラシーとは狭く政治の意味でなく人類のあり方。政治論は『公衆とその諸問題 The Public and its Problems』など。

## 2 第4章「成長としての教育」

### 一、成長の条件

#### ②成長の条件

**未成熟 immaturity** × in- 単なる空虚ないし欠如 {欠如態}  
- 可能能力 capacity {可能態}  
+ 潜在力 potentiality {現実態へ}

現在積極的に存在している勢力—発達する能力

③ ×固定した標準から、それとの比較で「欠如」をみる。その間隙を埋めようとする。{プラトンのアイデア}

⑤生命のあるところには、すでに強く激しい活動力が存在している

成長は、その活動力がなすもの

未成熟の2つの主な特性 **依存性 dependence** **可塑性 plasticity**

⑥子どもたちは無力ではない 社会的交わりに必要な第1次的能力を付与されている

⑦相互依存性 (他人を必要とする②⑤)

⑧可塑性 自分の**性向 disposition 心的傾向**を保持しながら周囲に同調する

さらに深く・・・経験から学ぶ能力

ある・・・

二、成長の現われとしての習慣 {徳を生み出す性向は、衝動か習慣か知性か—アリストテレス『ニコマコス倫理学』}

### 三、発達という概念の教育的意味

⑱ (i) (ii)

⑳ ×3つの考え・・・教育上の対応

㉒㉓教育とは・・・

㉔エマソン 「子どもを尊重せよ・・・同時にあなた自身をも尊重せよ」

こんかいは、A と B が対立しているわけではない。B も否定されているわけではない。

A 成長の条件 未成熟	B 成長の条件 未成熟
×欠如 △可能性 ○潜在力	依存性と可塑性
C ◎☆成長 教育 ←disposition	

子ども→あなた自身

※A と B の「条件」の話の時に、C の話がもうどんどん入ってくるので、わかりにくいですね(^\_^)

ー1 『民主主義と教育』を読むときの注意 「難しさ」のわけ

デューイはその主張を肯定しているのか否定しているのか？

①英語は、ちがう単語を使っていくが、ある場面では、固定して使い分けている場合がある。日本語との対応。

目的・目標 aim goal end ※考え方としては end が重要（探究の予想される終局）

基準 standard criterion norm ※デューイ自体に「基準」「規準」の区別はない

成長・発達 development growth ※ヘーゲルやフレーベルの development を批判して、growth を提唱（それで成長でなく生長と訳す場合がある）。ところが、development を growth の意味で使っていく。

集団 society community occupation ※DE では政治は省略（state association は別の著作で）

職業・仕事 vocation calling occupation ※第 23 章では、vocation 職業、calling 職分、と区別。

※オキュペーションは、集団と職業の両方ででてくる用語。

②デューイの思考の根底には、だいたい、以下の直観の形がある。（三つ組みも多い）

デューイは A も B も批判して C を主張。ただし、A のよいところは高く評価していたりする。

A	B
C	

そして、『民主主義と教育』はこれがタンスのように積み重なっている。

# 「民主主義と教育」

## 目次

第一章	生命に必要なものとしての教育	一一
第二章	社会の機能としての教育	三五
第三章	指導としての教育	四八
第四章	成長としての教育	七四
第五章	準備、開発、形式陶冶	九三
第六章	保守および進歩としての教育	一六
第七章	教育に関する民主的な考え	三三
第八章	教育の諸目的	六一
第九章	目的としての自然的发展と社会的に有為な能力	一八〇
第一〇章	興味と訓練	二〇〇
第十一章	経験と思考	二三三
第十二章	教育における思考	二四二
第十三章	教授法の本質	二六一
第十四章	教材の本質	二六五

## 7 目次

〔以下下巻〕

第一五章	教育課程における遊びと仕事
第一六章	地理および歴史の意義
第一七章	教育課程における科学
第一八章	教育的価値
第一九章	労働と閑暇
第二〇章	知的学科と実際の学科
第二一章	自然科と社会科：自然主義と人文主義
第二二章	個人と世界
第二三章	教育の職業的側面
第二四章	教育の哲学
第二五章	認識の理論
第二六章	道徳の理論

訳者解説

24章 教育の哲学 キーワード：教育哲学

加藤 聡一

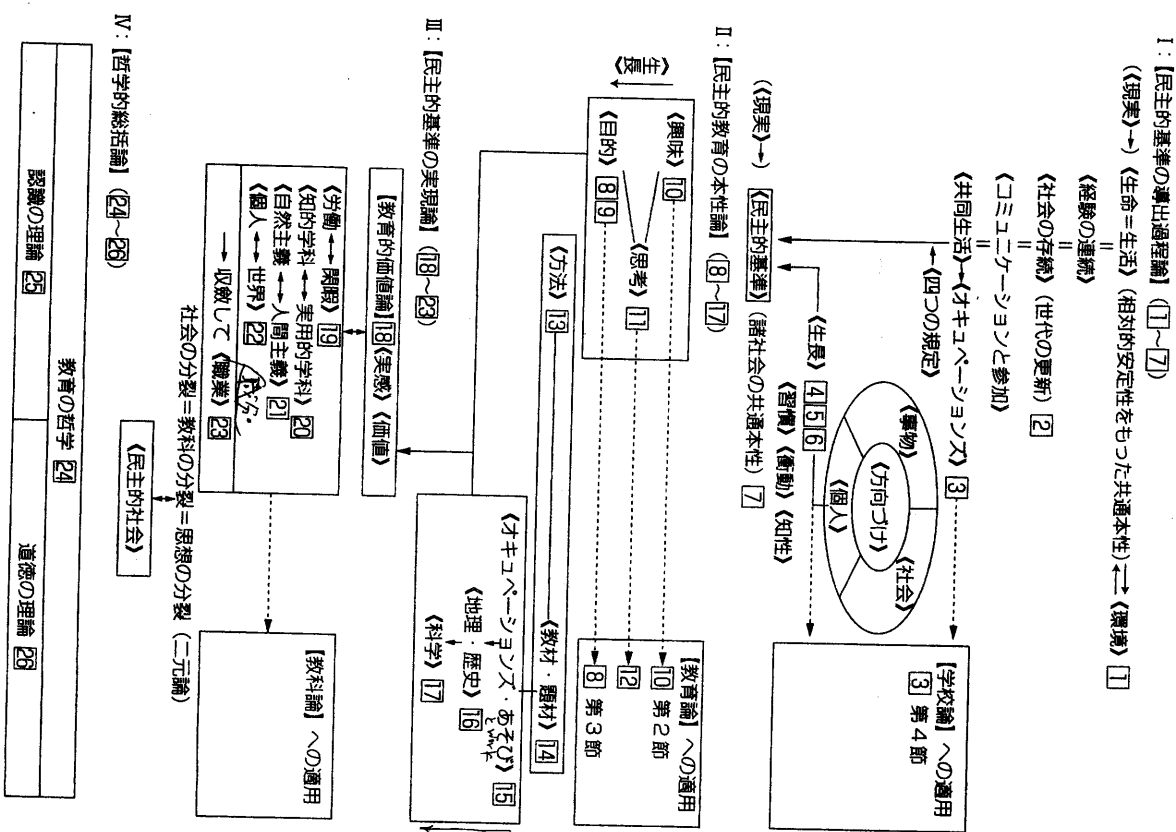
『民主主義と教育』第24章になって、ようやく著作の副題にでていた哲学・教育哲学 (philosophy of education) が考察される。

第23章までの叙述に「論理的秩序 (logical order)」(MW9: 331, 訳書: 191) があったことが明かされる。民主的基準を導き出し (I), それによって教育の方法と原理を検討し (II), そして以上の基準がどの程度実現されているか (III), という三つの、角度のちがう連続しない構成が示される。章や概念の相互関係について、図1「『民主主義と教育』構成=体系図」にまとめた。『民主主義と教育』は、この論理的秩序をおさえないと理解できない。同時に、ここまで展開してきた内容の批判として哲学が考察されるから、第24章だけを最初に読んでも理解は難しい。

フック (Sidney Hook) によるイントロダクション (MW: i~xxiv) もこの論理的秩序をおさえていないし、松野安男までもが訳書解説で「体系的に整理」されていないと誤解して論理的秩序を意識していない (訳書: 252)。デューイのヘーゲル的な閉じた体系への批判にとらわれて、デューイには体系がないという思いこみもあるだろう。大学での哲学の講義・講読やセミナーで何かのテキストを取り上げる際、講義やセミナーの進行に沿って読むのではなく、はじめに全体を読んだ状態で、検討をはじめたものであるが、案外そういう方法の忘却が背景にある。第24章まで読まれていないのではないだろうか。

デューイは、哲学を「世界に対する心的傾向 (disposition・性向とも訳す)」から見る (MW9: 334, 訳書: 196)。この世界に対する行動の、その都度連続をはかる一貫性が、哲学の一般性、総体的性、究極性、全体性を要請し結果として体系を構成する。『総体的』態度が必要になるのは、生活における互いに衝突するさまざまな関心を行動において統合することが必要であるからである (MW9: 336, 訳書: 198)。ここに思考・熟慮が起動する。またこの衝突が社会的である場合、「社会的調整の計画」が必要とされ、これが哲学である。この反社会的の計画

図1 『民主主義と教育』構成=体系図



(注1) Ⅰ~Ⅳは章をあらわす。  
 (注2) Ⅰ~Ⅳの名称は加藤がつけた。growthは生長と訳した。  
 (注3) Ⅲの『共同生活』が広義の『オキエンションズ』でⅣの『オキエンションズ』は、教材・題材の面からみている教育の意味。

思い起こし、学校にそのような活動、つまり料理、繻み物、裁縫、木工、栽培などを導入しよう提案した。導入してみると、子どもたちが生き生きと活発になり、愛情が湧くとなり、騒がしくなり(活発に話し合う)、学校の雰囲気が一変した。ここには人間の本性・内なる自然(human nature)に即した「何か」隠れているのがあるとの直感・実感、世界中の同じような試みを始めた実践家たちに共有されるものだった。

フーニーはソカ大学に学部長(哲学・心理学・教育学)として在籍していた1896年に、付属実験学校(Laboratory School)を開校して自ら実践・指導を行った。はじめは生徒16人、教師2人。3年間だけの実践で他校へ報告を終了した。この途中報告とさらなる協力を求めた3つの講演と関連する論文をまとめたものが「学校と社会」であり、新教育のいわばバブルとして世界的ベストセラーとなった。

導入された諸活動をフーニーは「オキュペーション(Occupations)」ととらえた。新しい教育は、「子どもをしっかりとついでおらずに子どもの心から腹を追い出していない神に逆らう行為」「単なる遊びで教育の筋に頼らない」などのような強い非難の中で行われることがあった。それらに対して「学校と社会」は、すでに広がっていた実践家たちの直感・実感に理論的根拠を与え、心の支えになったことが広く認められた一因であろう。

「オキュペーション」は、活動的作業、仕事、労作、生活などと訳されているが、「占める」という語源は、「子どもが何か心に奪われて、何かにとりつかれたかのように熱中・専心している」状態を表している。フーニーは「オキュペーション」をさらに「胎生の社会(an embryonic society)」ととらえ、それが随分高く美しく調和のとれた民主的な(大きな社会(a larger society))に育つ実践を構想した。

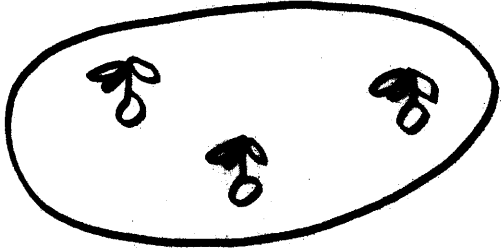
「オキュペーション」には、仲間があり、先達もあり、共通の目的と参加・コミュニケーションと調整がある。問題状況の中でその解決、目的の実現がはかられる。各自の居場所があり、役割分担が行われる。直接的な声や想像的な「声」のやりとりと議論がある。道具を使って集団的にモノや自然に働きかける実践を構想した。

フーニーは、その内部に分化した構成要素(教科や情報センターなど)を「オキュペーション」の全体を「オキュペーション」として発展させる(II)。そしてついに、大きな社会になっていく(III)。このIIIのレベルでは、「共通の目的」「社会的目的」になり、「道具」は「生産手段」になり、「役割分担」は「職業」になるなど、同じ構造が内容を社会的に拡大・充実させて出現する。occupationには、「職業」という意味もあるのである。直接的な「声(voices)」のやりとりは、vocation(職業・天職)、calling(職業・天職)などの社会的で想像的な声のコミュニケーションになり、産業社会を構成する。

理解の補助線として大学のセミナー(II)を発展過程の間にに入れてみた。日本では、文献研究を手堅く集団で行いながら、フールドグループに出たり実験・調査に取り組みが増えている。研究室は探究的生活共同体ともいえる。フーニーの構想は、現実には今日の大学をイメージすると理解しやすい。総合学習と教科の関係も、セミナーと講義の関係で考えると、二項対立的発想を克服しやすい。特に中学校で「総合的な学習の時間」で何をしたいかわからないという教師の悩みがあるが、大学時代のセミナーを思い起こし、それぞれの学校で生徒たちと一緒にセミナーを行うことを考えてみれば、やりたいことが次々湧いてくるのではないだろうか。

山崎 菜月 特別編集「日本の教育史」(2010年)

オキュペーション  
Occupation



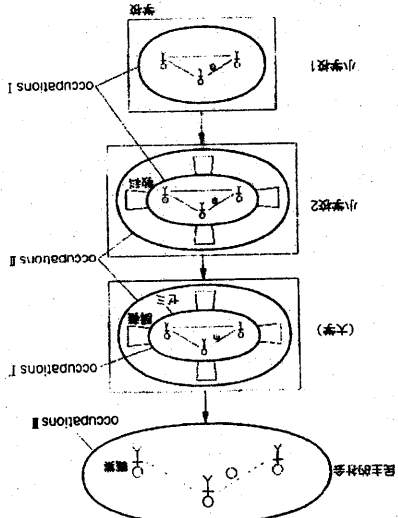
### 3 新教育と「オキュペーション」

(1) 「学校と社会」(1899年)をめぐって

分業の時代において、「総体的性=全体性=統一性の回復・更新・実現」をフーニーはめざしたが、教育の場においては、とりわけ、学校が、人間自身のそして子ども自身の必要性から分業・分離していることに問題を見た。

開拓時代の「大草原の小さな家」には、水くみやろくく作りなど生産活動があり、家族は小さいながらも一つの共同体であった。子どもにも切実な必要性と役割があり、生活の中で子どもたちは学び成長した。フーニーは、それらを

図10-1 Occupationsの発展(総合学習からセミナー、そして民主的社會へ)



かけ、そのとき情報や知識を使ったり、知恵をしばったり、科学を学び発展させたりする。必要性を感じる生活があり、生活陶冶がある。人間本性が開花していく生長(growth)がある。一体感があり安らぎがあり達成感がある。人間同士の連帯、自然との共生がある。外部の人間集団や自然との豊かなやりとりがある。これは小さくとも立派に一つの探究的生活共同体だといいたい。

「Occupationsの発展」を図にまとめてみた(図10-1)。この図を下から見ると「(一) (Enbet)なる細胞が、発達・分化・生長するイメージである。日本では、「学級」がそういう共同体でもありうるが、明確には総合学習といわれるような諸活動が「オキュペーション」に相当する(II)。「オキュ